



TITLE:

椎間板後方突出に関する病理解剖学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

大室, 耕一

CITATION:

大室, 耕一. 椎間板後方突出に関する病理解剖学的研究. 京都大学, 1962, 医学博士

ISSUE DATE:

1962-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210839>

RIGHT:

【 40 】

氏 名	大 室 耕 一 おおむろこういち
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 5 8 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	椎間板後方突出に関する病理解剖学的研究

(主 査)
論文調査委員 教 授 近 藤 鋭 矢 教 授 荒 木 千 里 教 授 青 柳 安 誠

論 文 内 容 の 要 旨

椎間板後方突出によって、神経根あるいは脊髄が圧迫、刺激され、神経痛とか麻痺が発症する場合があります。椎間板ヘルニアあるいは脊椎骨軟骨症として、整形外科臨床上興味ある問題を提示している。

著者はかかる椎間板後方突出が実際にはいかなる頻度、程度および形態で存在するかを調べ、さらには後方突出と椎間板内部変化との関係を検討するとともに、臨床との関連をも追求すべく、屍体椎間板について病理解剖学的検索を行なった。

学生の解剖実習に用いられた屍体 100 体（男 55 体、女 45 体、17 才～88 才、平均年令 61 才）の脊柱において、第 1 頸椎より仙椎に至る脊柱全域にわたって脊椎管を露出、椎間板後方突出の状態を観察して後、全椎間板のほぼ中央部に水平切断を加えて、椎間板内部における髓核および線維輪の変化を肉眼的および組織学的に検索した。その結果は次のごとくである。

1) 椎間板後方突出は稀なものではない。軽度の突出をも加えて、これは調査脊柱の 92% という高率に認められた。突出は頸椎部に最も多く、胸椎部には比較的少ない。

2) 椎間板後方突出の形態を 2 大別できる、主として髓核ヘルニアに起因する結節状の突出と、椎間板変性に由来する稜状の突出である。頸椎部において、稜状突出と、結節状突出の混在した形の突出が認められたが、髓核ヘルニアのある椎間板に変性が進展したため、かかる形態をとったものと思われる。

3) 線維輪の放射状断裂裂隙に向かう髓核の脱出を、その突出形成の有無にかかわらず、髓核ヘルニアと見なしたが、後方脊椎管への髓核ヘルニアは 95% の高率に認められた。頸椎部に最も多く、腰椎部に少ない。

前方あるいは、側方の脊椎管外への髓核ヘルニアは胸椎部に多く、頸椎部に少ない。線維輪放射状断裂は線維輪が薄くかつ外力負荷の大なる部分に起りやすいと考えられる。

4) 椎間板の著明な変性所見は 45% に認められた。頸椎部、腰椎部に多く、胸椎部に少ない。

5) 後方髓核ヘルニアの約 1/2 は後方に突出していない。年令の増加に伴って、椎間板に退行性変化

がおこり、線維輪は断裂を生じやすくなるが、断裂がおこっても、髄核は流動性に乏しいので突出することが稀なのであろう。

また一方頸椎部のごとく、髄核の量が少なく後縦靱帯が比較的厚い場合は巨大突出を形成し得ないと思われる。臨床症状を発症せしめ得るような巨大突出となるためには、線維輪の断裂に際して、髄核が多量でかつ流動性に富み、後縦靱帯の抵抗にうちかって膨出する能力を有することが必要であろう。

6) 頸椎部には後方髄核ヘルニアが頻発する。この結果、椎間板は速かに変性に陥り、高年者では頸部脊椎骨軟骨症はごくありふれた病態となる。

7) 組織学的に、髄核ヘルニア椎間板にはいろいろな程度の変性所見が認められるが、変化は髄核中心部に比し、髄核脱出部に著明である。

論文審査の結果の要旨

脊柱の椎間板が後方に向って突出あるいは膨隆し、脊髓神経根を刺激して神経痛を起こし、あるいは、脊髓を圧迫して末梢に麻痺をきたすことが少なくないが、椎間板ヘルニアあるいは脊椎骨軟骨症として近頃整形外科および神経外科临床上多大の関心がもたれるようになってきた。

著者は屍体100体の脊柱より得た2,300個の椎間板につき、椎間板突出の状態を綿密に観察し、かつ、椎間板内部における変化を肉眼的ならびに組織学的に検索して多くの貴重な新知見を得たが、本研究は椎間板ヘルニア、脊椎骨軟骨症における発症機転の解明に寄与するところが多く、貴重な研究業績といえる。よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。